**「ラーマクリシュナの福音」勉強会　第５５回　（２０１９年０９月１０日）**

**・第５５回の勉強範囲：「第三章　ヴィディヤー・シャーゴル訪問」３１頁～３３頁**

前回の訂正：シュリー・ラーマクリシュナが挨拶に行く相手

信者や悟った人だけではありません。何においても高いレベルの人、偉大な人のところに挨拶に行きました。彼らに、神の偉大なあらわれを見たいからです。

たとえば（ギーターにあるように）とても美しい美人も神様のあらわれ、ヴィディヤー・シャーゴルも（彼は悟った人でも信者でもありませんが）学問と慈悲に関して偉大な方で、神の偉大なあらわれです。

📖読み

『福音』３１頁下段最終L～３２頁上段L３

*ヴィディヤー・シャーゴルは、他人に宗教的な教えを与えることは極度に控えていた。彼はインド哲学を学んでいた。ある時、Mがそれについての意見をたずねたところ、彼は、「学者たちは自分の思っていることを説明しえなかったのだと思う」と言った。*

（解説）

**１. ヴィッディヤー・シャーゴルの態度**

**①聖典についてのヴィディヤー・シャーゴルの結論**

ヴィディヤー・シャーゴルは、偉大な学者で聖典も勉強しました。彼の結論は、「聖典の著者たちは、ブラフマン、真理、神について説明したくてもできなかった」というものでした。

聖典の著者たちは、知性、心、言葉という道具を使って聖典をあらわしました。しかしそれらの道具は有限なものです。ですが聖典のテーマである真理は、無限です。ヴィッディヤー・シャーゴルは、「無限なものを有限な道具で説明することはできない。だから聖典の著者たちはブラフマンを説明したくても、説明できなかった」と結論付けたのです。（一方で社会学や歴史学などの普通の学問、すなわち物質的なものや世俗的なものは有限なので説明ができる）

「聖典は真理を説明しきれなかった」というヴィディヤー・シャーゴルの結論は、この観点においては正しいと言えます。

学校の先生が一生懸命にいろいろな方法で、生徒に自分が教えたいことを説明しても、学生は先生が何を言っているか分からない、と言うことがありますね。それと同じように聖典も説明しきれなかったと捉えたのです。

ですからMさんから神様についての意見を尋ねられたとき、次のような自分の結論を答えたのでした。

「聖典の作者は神様について説明を試みたが、伝えきることができなかった。だから、私は聖典の勉強をたくさんしたが、神様について知ることはできなかった」と。

📖読み

『福音』３２頁上段L３～上段L９

*しかし日常生活では、彼はヒンドゥのすべての儀式を尊重し、ブラーミンの聖糸を身につけていた。神については、ある時こう言っていた、「彼を知ることはほんとうに不可能だ。それでは、何がわれわれの義務であるか。私には、もし他者が自分をまねたら、この地上がそのまま天国になるように生きるのが義務であると思われる。各人が世間に対して善をなすよう努めるべきである」*

（解説）

**②ヴィディヤー・シャーゴルは不可知論者といえる**

神聖な人にとっての人生の目的は神を悟ることですが、ヴィディヤー・シャーゴルはどんなに聖典を勉強しても神を知ることはできない、と思っていました。ですから彼にとっての人生の目的は悟りではなく、「自分が完璧になって他の人を助ける」「他の人も同じように完璧になって善をなし合う」ことだと言いました。そうすればこの世界は、憎しみや暴力などの否定的な性質がなくなり、天国のようになる、と考えたからです。

神に対する３つの態度（考え方）があります。

①無神論者（atheist）神様はいない

②不可知論者（agnostic）神の存在は信じているが、神の本性は理解することができない。だから神の本性を理解するための霊的実践も必要ない。

③神の信者（devotee）神様はいる。神を信じている。神の本性を理解したい。そのために霊的実践もする。

ヴィディヤー・シャーゴルのように、「神はいる。だが神について理解することはできない。だから理解しようのないものを理解しようとして実践することにも意味がない」と考える人のことをagnostic（不可知論者）といいます。

**③ヴィディヤー・シャーゴルの人生についての考え方**

ヴィッディヤー・シャーゴルの人生の目的は「自分が完璧になって、他の人を助ける」ことで、そのように実践しました。悟りが人生の目的ではありませんでした。

参加者「ではヴィディヤー・シャーゴルは、自分は悟ることができないと思ったのですか？」

ヴィディヤー・シャーゴルは、神様の存在を信じており、ヒンドゥ教の伝統に従って儀式をおこなってはいましたが、彼には神様を悟るという考えがありませんでした。

📖読み

『福音』３２頁上段L１０～上段L１３

*シュリー・ラーマクリシュナの話は、今度はブラフマンの知識のほうに向けられた。*

*師「ブラフマンはヴィディヤーとアヴィディヤーとを超越しています。それはマーヤー、つまり二元性という幻影を超えています。*

（解説）

**２. タクールとのブラフマンとマーヤーについての対話**

**①ヴィディヤー・マーヤーとアヴィディヤー・マーヤー**

（☞『輪廻転生とカルマの法則』１０９～１１１頁）

知識と無知の話をしているうちに、シュリー・ラーマクリシュナはブラフマンについて話を向けられました。このときタクールは、「ブラフマンはヴィディヤーもアヴィディヤーも超越（トゥリヤー）しています」と話しましたが、それは、「サットワ、ラジャス、タマスを超越する」ということと同じです。

~~今~~ここで、ヴィディヤー、アヴィディヤーという言葉はマーヤーの関係で出ています。

マーヤーには、ヴィディヤー・マーヤーとアヴィディヤー・マーヤーの二つがありますが、それぞれが何を指しているか分かりますか？

参加者「日本語で言うと、ヴィディヤーが知識で、アヴィディヤーが無知でしょうか？」

ヴィディヤーとアヴィディヤーという言葉の意味はそうですが、ヴィディヤー・マーヤーとアヴィディヤー・マーヤーにはそれぞれ独自の意味があります。

ヴィディヤー・マーヤーもアヴィディヤー・マーヤーもマーヤーですが、ヴィディヤー・マーヤーはサットワ的で、アヴィディヤー・マーヤーはラジャス的タマス的だとイメージしてください。ヴィディヤー・マーヤーとアヴィディヤー・マーヤーの翻訳は難しいですが、

①ヴィディヤー・マーヤーは「知識・解脱へと導くマーヤー」で、

・サットワ的　・good 　・霊的マーヤー　・よい質のマーヤー（慈悲深い、謙虚、正直）

です。

②アヴィディヤー・マーヤーは「無知・束縛へと導くマーヤー」と言え、

・ラジャス、タマス的　・not so good　・世俗的マーヤー　です。

福音の中に、三人の泥棒の話がありました。　☞（『福音』166頁上段）

①タマス的：（一人目の泥棒は、金持ちを殺そうとしました）

苦しみ、悲しみ、鈍い。その考えが心にあると、ネガティブな気持ちが大きくなります。

例えば、何かするとき「できない、できない…」と考えたり、病気のときに「治らない、治らない…」と考えてしまいます。タマス的な人は、ネガティブで破壊的です。

②ラジャス的：（二人目の泥棒は、金持ちを縛りました）

ラジャスは活動的です。束縛に導きます。執着があります。その結果で最終的に苦しみが生じます。

③サットワ的（三人目の泥棒は、金持ちを逃がしました）

サットワだけが解脱へと導きます。

イーシュワラはマーヤーを超越したもの、つまりヴィディヤー・マーヤーとアヴィディヤー・マーヤー両方を超越したものです。マーヤーとは超越されるべきものなのです。

📖読み

『福音』３２頁上段L１４～上段L１９

*この世界は、知識と無知という二元性の幻影でできています。それは知識と信仰を持っており、そしてまた、『女と金』への執着も持っている。正義と不正義、善と悪を含んでいる。しかしブラフマンはこういうものには属してはいません。善と悪は正義および不正義と同様、ジーヴァ\*に当てはまるものです。しかしブラフマンはまったく、それらの影響は受けません。*

ジーヴァ：肉体を持つ魂。生き物。普通の人間。（『福音』用語解説より）

（解説）

**ジーヴァは****ヴィディヤー・マーヤー、アヴィディヤー・マーヤーを超越していない。**

世界の中には、良いもの、悪いものの両方があります。ヴィディヤー・マーヤーもアヴィディヤー・マーヤーもあります。ジーヴァとは、個人的な意識を持っている人のことです。ジーヴァには、ヴィディヤー・マーヤーとアヴィディヤー・マーヤーの両方の影響があります。性格のことを考えて下さい。ある人の性格の中に、良い性質と悪い性質の両方がありますね。そして一般的な人は、そのどちらも超越できていない。

**ブラフマンはヴィディヤー・マーヤー、アヴィディヤー・マーヤーを超越している**

ブラフマンはヴィディヤー・マーヤーとアヴィディヤー・マーヤーのどちらの影響も受けません。

ブラフマンはどの個人にも魂として遍在していますが、みずからを魂（ブラフマン意識）と自覚できない場合、ブラフマン意識は忘れられ、「私」という個人的意識にせばめられます。その状態の個人を「ジーヴァ」といいます。ブラフマンは、どのジーヴァにも魂（意識、アートマン）として遍在していますが、それはあらわれていないので、マーヤー（ヴィディヤー・マーヤーとアヴィディヤー・マーヤーの両方）に影響されます。しかしブラフマンは、マーヤーを超越しています。マーヤーを超越しているのでマーヤーの影響は受けません。

**超越しないと悟れない**

とても良い人の中にも少し悪い性質はあるし、悪人の中にも少し良い性質があります。どんなにサットワ的な人にも少しのラジャスとタマスがあるのです。ジーヴァはサットワ・ラジャス・タマスという性質を超越していません。つまりマーヤー（ヴィディヤー・マーヤーもアヴィディヤー・マーヤーも）を超越していません。

例えば、ヴィディヤー・シャーゴルはとても良い性質の持ち主で、悪い性質はほとんどありませんでした。ですが自分の性質を超越してはいませんでした。ですから人生の目的は「完璧な善人となる」ことでしたし、（前回話したように）自分の慈善行為を批判する人たちへの感情もありました。しかしほとんど良い性質だったので、シュリー・ラーマクリシュナは、ヴィディヤー・シャーゴルに対し、「少し実践をするだけで、あなたは悟ることができます」と言いました。ほとんど準備はできていましたから。

**超越しない限り堕落する可能性がある**

ヴィディヤー・シャーゴルには、目に見えないくらい小さな小さなアヴィディヤー・マーヤーがありました。このアヴィディヤー・マーヤーは何かの原因で、突然大きなアヴィディヤー・マーヤーになる可能性があります。サットワからラジャス、ラジャスからタマスに堕落する可能性があるからです。

例えば、『シュリーマッド・バーガヴァタム』の中のアジャーミラは、最初とても良い方でしたが、突然執着にとらわれ、罪人になりました。

また、ジャダバーラタはとても良い聖者でしたが、シカに執着してしまい、シカの命で生まれ変わりました。悟らないと、このようになる可能性があるのです。

タバコの火はとても小さくても、火事になる可能性があるのと同じです。

しかしブラフマンはマーヤーを超越しており、ブラフマンにはマーヤーの影響はありません。シュリー・ラーマクリシュナは、ランプと太陽を例に引いてその説明をしています。

📖読み

『福音』３２頁上段L２０～上段L２３

*一個のランプの光で、ある男はバーガヴァタムを読み、別の男は同じ光でをつくるかもしれません。しかしランプには何の影響もない。太陽はその光を、有徳の者たちの上に注ぐと同じように、邪悪な者たちの上にも注ぐのです。*

（解説）

ランプの本質は、光を与えることです。その光をどのように使うかは、使い手の問題です。

ランプ自体は誰に光を与えるか、区別することはなく、皆に光を与えます。太陽も同様です。

📖読み

『福音』３２頁下段L１～L５

*『それでは苦痛や罪や不幸をどのように説明するのか』ときかれるかもしれない。これらはジーヴァにだけあてはまるものだ、というのが答えです。ブラフマンはそれらに影響されない。ヘビには毒がある。しかし、他のものはそれにまれたら死ぬかもしれないが、ヘビ自身はその毒の影響を受けないのです。*

（解説）

**ブラフマンはマーヤーの影響を受けない**

この「ヘビと毒」の話は、ブラフマンとマーヤーをわかりやすく説明した例として有名です。ヘビは毒を持っていますが、その毒が自分に影響することはありません。同じように、ブラフマンはマーヤーを包含していますが、マーヤーがブラフマンに影響することはありません。

ですから「苦痛や罪や不幸」というマーヤーの問題は、マーヤーを超越していないジーヴァだけにあてはまります。ブラフマンは、マーヤーを超越しているのでその影響を受けることはありません。

（アドヴァイタ（ヒンドゥ教の非二元論的考え）は、「ブラフマンただ一者だけが存在する」と考えます。マーヤーはブラフマンの一つの表れと考えているからです）

📖読み

『福音』３２頁下段L６～下段L１２

*ブラフマンはどんなものであるか、ということは説明できません。この世界にあるすべてのものは—ヴェーダも、プラーナも、タントラも、六派の哲学も—舌をつけられた食物のように汚されている。舌によって読まれるか話されるかしたのだから。たった一つのものが、このようにして汚されていません。それはブラフマンです。いまだかつて、ブラフマンがどんなものであるかを言うことのできた人はいないのです」*

（解説）

**３. タクールの「ウッチシュタン」についての話**

ベンガル語にウッチシュタンという言葉があります。その言葉の意味は、「食べ物、飲み物など、口から出たものは、すべて汚れている」です。インドでは、口に入れたものは汚いので、人にあげません。とても厳しいです。ウッチシュタンの一般的なイメージは、食べ物などの粗大なものについてですが、『福音』の中では、精妙なもののことについてそのアイデアが使われています。もっと包括的な意味にウッチシュタンを捉えているのです。シュリー・ラーマクリシュナは、「言葉は口から出るので、言葉すらも汚れている（ウッチシュタン）。ヴェーダとプラーナなどの聖典も、口から言葉に出して唱えられているので、汚れています。しかし、ブラフマンだけは、口（言葉）で説明することができないので、汚れることはありません」と言いました。これはシュリー・ラーマクリシュナ独自のアイデアです。とても面白いですね。

ヴィディヤー・シャーゴルの結論「聖典を言葉で説明することはできない」というのと、同じ意味合いです。

📖読み

『福音』３２頁下段L１３～下段L１４

*ヴィディヤー・シャーゴル（友人たちに）「おお！　これは注目すべき宣言だ。私はきょう新しいことを学んだ」*

（解説）

ヴィディヤー・シャーゴルは、シュリー・ラーマクリシュナからウッチシュタンについて、「言葉は口から出ているので、口でとなえる聖典すらも汚れている。ただ一つ、言葉であらわすことができないブラフマンだけが汚れていない」、というアイデアを、初めて聞きました。

📖読み

『福音』３２頁下段L１５～３３頁上段L４

*師「ある人が二人の息子を持っていました。父親は彼らにブラフマンのを学ばせようと思って、ある教師のもとに送った。数年後に彼らは師の家から帰ってきて、父親の前に低く頭を下げました。彼らのブラフマンのの深さを計りたいと思って、父親はまず、兄のほうにたずねました。『わが子よ』と彼は言った、『お前はすべての聖典を学んだ。さて、話しておくれ。ブラフマンはどういうものであるか』息子は、ヴェーダのさまざまの本文を朗誦してブラフマンを説明しはじめました。父は何も言いませんでした。彼はそれから弟に向かい、同じことをたずねました。しかし少年は目を伏せ、黙って立っていました。彼の唇からは、一言ももれませんでした。父は満足して彼に言いました、『わが子よ、お前は少しばかりブラフマンを理解したようだ。それがなんであるかということは、言葉では表せない』と。*

（解説）

**４. 「真理は言葉で説明することはできない」の例**

ここに出てきた息子たちの例は、「ブラフマンは有限な道具で説明することはできない」ことの具体例です。

バガヴァッド・ギーターやウパニシャッドには多くの「ブラフマンとは何か」の説明があり、「これがブラフマンです」という説明と、「ネーティ、ネーティ、これではない、これではない」という２つの方法での説明があります。上の息子は、そこからたくさん引用をして父に説明しました。しかし、説明すればするほど、それはよりウッチシュタンになってしまいます。下の息子はブラフマンを言葉で説明できなかったので、黙っていました。

ブラフマンが本当はなにかは、分からない。なぜなら、有限な道具で無限は説明できないからです。言葉の説明には限度がありますから。

例えば、寿司を見たことのない人にどれだけ寿司について説明をしても理解できないように。言葉でヒントを与えることはできますが、本当の寿司を説明はできない。寿司についての完璧な答えは、「食べてみてください」です。（笑い）

『福音』の中では、ギーとは何かついて言葉で説明できない、と言っています。

寿司について、ギーについて、言葉、絵、写真、口など、すべて感覚を通して説明します。しかしそれで説明はしきれません。心でも知性でもできない。なぜなら、感覚も心も知性も有限なものだからです。我々個人の人格の中にあるすべてのものは有限です。我々の中で、ただ一つ、魂、アートマンだけが無限です。

📖読み

『福音』３３頁上段L５～上段L１０

*人びとはしばしば、自分はブラフマンを十分に理解したと思うのです。あるとき一匹のアリが砂糖の山に行きました。一粒でそれは満腹し、もう一粒を口にくわえて巣に帰る途中、『このつぎには、山全部を持って帰ろう』と思ったそうです。あさはかな心はこのように考えるのです。彼らは、ブラフマンは言葉も思いも超えたものであるということを知りません。*

（解説）

**５. 人はしばしば自分はブラフマンを理解したと思うが、アリが砂糖の山の一粒を食べて、山すべてを知っていると思うのと同じ**

「砂糖の山とアリ」の例は、ジーヴァの浅はかさ、エゴ、うぬぼれ、高慢についての、とても有名でわかりやすい例です。

学者は神様について、たくさんの本を書いています、「神様はそれです」と。学者は自分の神様のイメージが正しいと思っています。しかし学者は自分の神様についての考えがどれくらい小さいか分からない。エゴ、うぬぼれがありますから。宗教と宗教の間でも、自分の考えだけが正しいと考えて戦いがあります。それは大きな問題ではないですか？

偉大な学者であったニュートンはとても謙虚な方でした。彼はさまざまな発見をしたにもかかわらず、こう言いました。

「私は、小石や貝殻を見つけて夢中になってきたけれど、私の目の前には真理の大海が発見されずに横たわっていた」。

スワーミージー（スワーミー・ヴィヴェーカーナンダ）がシカゴの講演で説明された、「井戸の中のカエル」も「砂糖の山とアリ」と同じたぐいの例として有名です。

井戸の中のカエルは、海から来たカエルに、海はこの井戸よりも大きいかと聞きます。海から来たカエルは笑って「もっと大きい」と言いました。

我々は、井戸の中のカエルや、アリのようです。

シュリー・ラーマクリシュナは、ジーヴァは超越しない限り、神を知ることはできない、と言っています。

📖読み

『福音』３３頁上段L１０～上段L１４

人はたとえどんなに偉くても、ブラフマンについてはどれほど知ることができましょう。シュカデーヴァや彼のような賢者たちは大きなアリだったかもしれません。しかし彼らでさえ、せいぜい八粒か十粒の砂糖を運ぶことができただけなのです。

（解説）

ブラフマンを言葉では知ることはできない。するとヴェーダやプラーナは無駄なのでしょうか？

いいえ、無駄ではありません。ヴェーダやプラーナの勉強、バイブル、バーガヴァタムの勉強は必要です。次の段落がそのテーマについてです。

📖読む

『福音』３３頁上段L１５～下段L２

*ヴェーダやプラーナに書いてあることについては、それがどんなものであるか知っていますか？　ある男が海を見ました。そして誰かが、『さて、海はどんなものか』ときくとします。その男はできるだけ大きく口を開き、『何という光景！　なんという巨大な波と音！』と言うだけです。聖典の中のブラフマンの描写は、そのようなものなのです。ヴェーダの中には、ブラフマンは至福という性質であると書いてあります。それはサチダーナンダです。*

*シュカをはじめとする賢者たちは、このブラフマンの大海の岸に立ってその水を見、それに手をふれました。ある学派の言うところによると、彼らはその中に飛び込みはしませんでした。飛び込んだ人たちはふたたびこの世界に帰ることはできないのです。*

（解説）

**６．聖典の勉強は実践のために必要**

ブラフマンというサチダーナンダの大海に飛び込むと、再びこの世界に戻ることができません。無限のブラフマンの大海は、有限の世界には二度と戻りたくないほど素晴らしいからです。

ですが我々（ジーヴァ）は有限の世界にいるからと言って、無限なことに関する、例えば、バガヴァッド・ギーターやウパニシャッドの勉強は無駄かというと、そうではありません。

・ブラフマンの本性とは何か。

・どのようにすればブラフマンを理解できるか？

・ブラフマンを悟る方法。

・悟るための障害とは何か。

・実践した結果はどういうものであるか。

は、聖典の中にあるからです。そして実践しないと何もできない。だから実践の前に聖典からなにをどのように実践するのかを学び、実践に進むのです。聖典の勉強はそのために必要です。

実践をして純粋になってブラフマンを悟る

何も実践しなければ、我々の状態は上がらず、ずっと無知な状態が続きます。

無知が続けば、苦しみ、悲しみはなくなりません。

ですが皆、苦しみ、悲しみは取り除きたい。

だから実践をして、ヴィディヤー・マーヤー、アヴィディヤー・マーヤーを超越します。

・今の我々の心の状態は純粋ではありませんが、その心が純粋になると、ブラフマンを理解し、悟ります。

・今の知性は不純ですが、知性が純粋になると、ブラフマンを理解し、悟ります。

悟ったあとは、「ア・ヴァーン・マナサ・ゴーチャラン」（☞『パタンジャリ・ヨーガの実践～そのヒントと例～』２０１頁）の状態です。それは、心や感覚や言葉では説明も理解もできない、それらを超越した状態です。つまりのところ、不純な心と知性を超越する、ということなのです。不純な心と知性を超越するためには、聖典を勉強して実践をすることが必要です。

実践をすると、心は純粋になります。知性は純粋になります。それは絶対にできます。その純粋な知性で、純粋な心で、マーヤーを超越できます。そのために実践が必要です。実践をするために聖典は必要です。それが結論です。

**Q　&　A**

Q：ヴィディヤー・シャーゴルは精妙なエゴが取れなかったのでしょうか？

Ａ：前回も言いましたが、ヴィディヤー・シャーゴルはトゥッリヤ・ニンダー・ストゥテイル マウニー（褒められても心静か、批判されても心静か）ではなかった。批判されると心が痛みました。ちょっと期待がありました。期待する心が問題です。問題はエゴではありません。

Q：ブラフマンがアートマンとなって私たちの中にあります。アートマンがあって、それを覆っている不純なものを修行することで少しでも取り去りたい。そのために毎日の修業として、そう思ってジャパをしているのですが、方法はそれでいいのでしょうか？

Ａ：それ以外に方法はありません。心の洗濯機、掃除機は、

識別する

神様に祈る

神様の名前を唱える

聖典の勉強をする

神様のことをもっともっと考える

全ての働き、行いを神様に捧げる（カルマ・ヨーガ）

です。

本当は、悟らないと、我々の心は１００％きれいにはなりません。

self-effort and grace (自己努力と神の恩寵)の二つが、『福音』のどのページにもあります。

あなたも頑張って、いろいろと実践をしてください。そうすると、神様は恩寵をくださいます。

そして、神様にお任せしてください。努力をしないと、苦しみ、悲しみはなくなりません。

Q：graceというのは、毎日お任せをするということですか？

Ａ：お任せすることがgraceなのではありません。graceのためにお任せするのです。

恩寵はfavor（好意、親切な行為、愛顧、寵愛、支持、賛成）です。

お任せ、surrender（引き渡す、明け渡す、放棄する）の結果でfavorです。

例えば、重いものを何度も自分の頭の上まで持ち上げようとしましたが、できない。その時、憐みと同情心によって、神様が助けてくださいます。

Ｑ：そのことがgraceなのですか？

Ａ：例えばそうです。

Ｑ：すごく一生懸命やってたら、悟れますか？

Ａ：神様のgraceが来ます。graceがないと不可能です。本当は神様の助けがないと、ゴールに達することはできません。

例えば、トター・プリーは悟るのに、４０年かかりましたが、それもgraceです。

アインシュタインがたくさんのことができたのは、神様が彼に特別なgraceを与えたからです。

お金持ちがある日突然、貧しい人を助けたい、と思うのも神様のgraceです。

あなたが努力をしていることも、神様のgraceです。

霊的な生活に興味があることも、神様のgraceです。

ここに来ていることも、神様のgraceです。

神様の信者になれたことも、神様のgraceです。

勉強を続けていることも、神様のgraceです。

堕落しても、あきらめずに再びやり直すことも、神様のgraceです。

悟りたいと切望する気持ちも、神様のgraceです。

神様のgraceにはさまざまなやり方があります。

だから、私たちは、決してあきらめるべきではありません。

全部、本当は神様のgraceです。

日本ヴェーダーンタ協会に来て、シュリー・ラーマクリシュナに出会ったこと、シュリー・ラーマクリシュナの信者になったこと、協会を手伝っていること、全て神様のgraceです。

私たちは恵まれています。

そして神様がすべてなさっています。私たちには何の資格もありません。もし神様の仕事をする機会が与えられているのだとしたら、それも神様のgraceです。このことは覚えておいてください。そうしないと、エゴが出ますから。そしていつもシュリー・ラーマクリシュナに感謝するべきです。協会に来て働く機会を与えていただけていることに。

ベンガルの有名な詩人であるタゴールには、ベルル・マトのスワーミージーの建物のベランダで書いた詩があります。

　あなたの慈悲。どのような道で連れてこられたのか分からない。

　突然私はあらわれた。あなたは、私をあなたの場所に連れてきました。

　どのようにそうしたのか分からない。突然私は目を開けてみました。

あなたの恩寵が、私をあなたの場所に連れてきました。ここ、ベルル・マトに。

日本ヴェーダーンタ協会はベルル・マトではないですが、タクールがまとめたベルル・マトの支部です。そう考えて、協会に来ると、結果として同じです。

（第55回『福音』勉強会）以上